表　　題	葬儀における生花装飾		
著　　者	髙見晴彦(取り纏め)		
作 成 日	2024年5月29日	最終更新	2024年7月19日

キリスト教会葬儀研究所(CCFI) http://www.ccfi.jp/

2024.05～07期テーマレポート

2024.07.12　日本のキリスト教葬儀における生花装飾の変遷　加筆

2024.07.16　キク，シキミ，サカキ　加筆

2024.07.19　ハス加筆　キクに電照栽培の記述を追加

葬儀における生花装飾

▽今日の葬儀受注における生花装飾の重要性

日本において1990年代以降に進んだ葬儀のいわゆる「個人化」は、単に参列者規模が縮小していったということだけではなく他面葬儀の「個性化」でもあって、それまでの社会における「普通の葬儀」からの脱却を志向する人たちが増えていったということでもありました。それまで戦後の高度経済成長期以降いわゆる一億層中流と言われたように人々は生活の安定を求め、葬儀においても多く「常識的であること」「人並みであること」「失礼の無いこと」「周囲に迷惑をかけないこと」等、世間から逸脱しないことが良しとされ、個性的な葬儀というのは一部の著名人・芸能人等のいわば表現の場であろうと捉えられていました。祭壇は段飾りのいわゆる白木祭壇が中心で、生花は葬具の隙間や祭壇脇の空間に飾られ、さらに外側に供花が整然と並ぶというのが一般的な葬儀空間のイメージとして定着していましたし、その生花も派手なものや突飛なものは避けられ、白や黄の菊等を中心としたものに紫(高貴な色と言われる)等の落ち着いた雰囲気を醸す花を加える程度が広く社会に受け入れられやすい内容でした。

90年代に入りバブル崩壊後の経済不安や宗教団体のテロ事件等による宗教離れ、インターネットの普及による情報流通の加速等が起こる中で、それまでの葬儀のありかたに対する不満や反発も徐々に大きくなっていき、葬儀は世間のためものではなく個人的なものであるという意識も強まってきました[1]。それまでの葬儀のスタンダードなイメージを象徴する大型の白木祭壇の需要は急激に減退し、代わって多量の生花を用いた装飾祭壇、いわゆる「花祭壇(生花祭壇)」が流行します。故人や遺族の好みによって赤やピンク等明るい色調の花、また洋花も多く使われるようになり、花を使って図形や絵を描くようないわゆる「デザイン祭壇」等も発案されていきました。当初はまだ生花祭壇の中に一部の白木葬具を置いたものもそれなりに見られましたが、その後も花祭壇需要はますます強まり、平成後期に入ると都市部を中心にもはや白木葬具を見ることはほとんど無くなっていきました。現在、葬儀受注の現場において「祭壇をどうしますか」というのは「どのような花を飾りますか」ということとほぼ同義であって、生花装飾の内容が(例えば量の多少等も含めて)「故人らしい」葬儀かどうかを参列者の中に意識付ける大きな要素のひとつとなっていると言っても過言ではありません。そのため生花に対する一定の知識を持ち、顧客のニーズを酌み取り満足する生花装飾を提案・作成できることも、今日における葬儀士の重要な能力

のひとつとなっています。

▽日本のキリスト教葬儀における生花装飾の変遷

今日、日本のキリスト教葬儀においてはいわゆる「洋花」を用いて祭壇を装飾することがほぼ当然であるかのように受け止められていますが、この傾向は特段に古くからのものではなく概ね1980年代頃に生じてきたものと見られます。これ以前はキリスト教葬儀においても他宗旨の葬儀同様、キクや造花の花輪等が用いられることが一般的で、70年前後に流行したいわゆるマナー本類においても生花の種類に関する言及は少なく、強いて拾うとしても「白いカーネーションや菊など*2」という記述が見られる程度です(カーネーションは日本においても明治末期から生産が始まっており、大正期に米国から入ってきた母の日の文化とともに、洋花としては早く昭和初期頃から広く用いられています)。また特にキリスト教の冠婚葬祭について書かれた書籍においても生花の種類に関する言及は見られない上、葬儀の項の挿絵がキクである*3こと等からも、「キリスト教＝洋花」という図式はこの時点ではまだ成立していないことが覗えます。

日本では1970(S45)年頃から1990(H02)年頃の間にかけて商用生花の生産が大幅に増加(作付面積で約2.2倍、生産額で約9倍)し、また昭和50(1975)年代に入ると切り花の輸入も増加していきます。生活が洋化していく中で切り花の需要もそれまでの伝統生け花中心から洋風フラワーアレンジメントに変化していき、所得の向上も相まって広く市民が生活用また業務用において切り花を消費するようになります*4。花卉の種類も大幅に増え、選択肢が広がったことが生花装飾が洋花化に向かう第一の理由となります。さらにこの頃は1974(S49)年に刊行された『死と葬儀』(日本基督教団信仰職制委員会編,日本基督教団出版局)等から見られるように、キリスト教葬儀についての「神学的な正しさ」といったものを再考しようとする流れの強まる時期と重なります。日本社会で大多数を占めていた仏教等の葬儀習俗からの分離・脱却が志向される中で、それらの葬儀に用いられる花としてイメージの定着していたキク等が敬遠される傾向が生じ、また「天国への凱旋、悦び」を表現するものとして明るい色の花も使用するといった説明もされていくようになったこと等が相まって、生花装飾の洋花への転換を押し進めていく動機になったと言えるでしょう。

▽葬儀の生花装飾に用いられる代表的な花材

装飾に用いる花卉は時季や流通の事情、注文者の希望や予算等により様々ですが、その中でも葬儀で比較的よく用いられる花卉をここに挙げます。なお種別は概略であり、例え

ば一本咲きの白菊とスプレーマム等の区別はせずここでは「キク」としています。

◇アレンジのベースとなる花

・カーネーション　・トルコキキョウ　・バラ　・キク

ベースとなる花の共通点として、流通量が多く一年を通して調達しやすいこと、白を含む複数の色があること、比較的強く真っ直ぐな茎の先端に花がついていること、茎が長く挿す場所によって適当な長さに切って使えること等、取り扱いの易しさや応用の利きやすさが挙げられます。一本咲きの品種でラインを取ったり、スプレー咲きの品種で空間を埋めたりと状況によって使い分けられますし、一種の花だけでも色や咲き方の違う品種を混ぜれば多様なアレンジを作ることができるのも魅力です。なお近年はあまり強くは言われなくなってきましたが、日本の仏教葬儀ではバラを、キリスト教葬儀ではキクを好まない傾向が見られます[5]ので、希望の聴き取りが必要です。

◇ベースを補助する花

・アルストロメリア　・ガーベラ　・デンファレ

流通の程度や色のバリエーション等使い勝手はベースとなる花と同様ですが、咲き方には幅がありませんのでベースとなる花に混ぜ込んでいく用い方が良いでしょう。

◇季節を感じさせる花

・チューリップ　・アネモネ　・マーガレット　・キキョウ
・スイートピー　・ラナンキュラス　・アジサイ　・コスモス
・フリージア　・スイセン　・ヒマワリ　・サザンカ

春に咲く花は種類も豊富で選択肢も広がりますし、ここに挙げたような花はよく知られているため希望されることも多いでしょう。夏以降に出てくる希望は切り花としてはヒマワリやコスモスが主です。時折「夏の花といえばハイビスカスが好きでした」等と言われることもありますが、ハイビスカスやアサガオ等は一日花(朝咲いて夕方に萎れる花)ですので切り花としては市場に流通しません。どうしても使用したい場合は、鉢植えを多数用意しておいて当日の式直前に咲いているものだけを切り、カトレアホルダー等を使って挿すことになりますから簡単ではなく費用もかさみます。自宅葬等で丁度その時に庭に咲いている花を使えるような場合には喜ばれるかもしれません。

◇華やかに目を惹く花

・ダリア　・オリエンタルユリ　・シンビジウム
・シャクヤク　・コチョウラン　・カトレア

◇ソフトな印象を与える花
・アリウム　・カンパニュラ　・ブルースター
・スカビオサ　・ブバルディア　・コデマリ

◇差し色が効く花
・オンシジューム　・エピデンドラム　・グロリオサ　・サンダーソニア

◇大きくアレンジできる花
・キンギョソウ　・グラジオラス　・デルフィニウム　・テッポウユリ
・ストック　・リンドウ　・チドリソウ　・スカシユリ

◇ボリュームを出す花
・カスミソウ　・ソリダゴ　・レースフラワー　・宿根スターチス

◇個性的な花
・ストレリチア　・ブプレウルム　・ワックスフラワー
・バンダ　・アカシアミモザ

◇萼、苞、実等を観賞する花材
・スターチス　・アンスリウム　・ニゲラ
・カラー　・クルクマ　・ヒペリカム(実)

◇葉物
・レザーファン　・ユーカリ　・タニワタリ　・レモンリーフ
・アレカヤシ　・ドラセナ類　・ハラン　・ゴット
・コルジリネ　・木イチゴ類　・ナルコ　・アイビー
・シロタエギク　・コニファー類　・モンステラ　・アスパラガス

◇資材類

・フローラルフォーム(生花用給水スポンジ)*6
・フラワーベース(給水スポンジ用水受け皿)*7
・カトレアホルダー
・ワイヤー
・フラワースタンド、ポット(オトシ)
・様々なアレンジベース
・藤や竹等の自然素材やプラスチック等の籠

▽生花の出回り期

近年切り花は生産スケジュールの安定や病害虫対策のため、種類によってはハウス栽培等が一般的となり(気候の安定した外国からの輸入が多い種もある)、一年を通して市場に並ぶ花も少なくありませんが、季節外れの花はやはり流通が少なく値段が高いことが普通ですから、「いつでも何でもある」ということを前提にはできません。一般的にはそれぞれ露地栽培(ハウス等でなく屋外の畑で生産する場合)の開花期よりも１～２ヶ月程前頃から、露地ものの開花が始まる頃までの流通が最も多いでしょう。これは世間(趣味の自家栽培等)よりも出回るのが少し早くなければ十分に売れないためだと言われています。例えば春の花であるチューリップやフリージアの露地ものの開花期は３～４月が中心ですが、市場にはクリスマスを過ぎたあたりからポツポツと並び始め、卒業式が過ぎたあたりには減り始めます。ハウスものの後に露地ものが出回る場合もありますが、生育期の天候等に左右されやすく確実ではありません。

▽管理に注意したい生花

通夜飾りがなく告別式等の当日に生花装飾を運び入れる場合であればよいのですが、前日に挿して一晩を過ごす場合には管理に注意したい花もあります。例えばブルースターやデルフィニウム、コスモス、アジサイ、ブバルディア、マーガレット等は水が下がりやすい花ですから、当日の開式前には萎れた花がないか確認して摘んだり挿し直すことも必要です。またキンギョソウやガーベラ等は短時間で上に向かって曲がる性質があるため、一晩経つと作成時に挿していた花の向きと変わってしまいアレンジの隙間が目立つような場合もあります(この対策として一般の花卉販売ではワイヤーを用いて花の向きを固定する方法が採られることもありますが、葬儀においてはお別れのために花を切る際に邪魔になるという問題点もあります)。ユリ類はお別れの時に花粉が衣服等に付かないよう、開式前に雄しべを除去しておくほうが良いでしょう。

生花装飾の作成は葬儀士ではなく生花事業者や社内の生花部門員が行うことがほとんどですが、挿し手が近くにいないような場合でも慌てずに対処できるよう葬儀士も最小限度の理解を持っておくほうが良いでしょう。

▽顧客の抱くイメージを酌み取る

生花の希望を聴き取る際、顧客から出てくるオーダーは必ずしも具体的なものとは限りません。例えば相手も花の種類等をある程度知っていて「フリージアを入れてほしい」とか「ユリを入れないでほしい」あるいは「白い花だけを使ってほしい」といった具体的なオーダーであれば単純に指定通りにすることで顧客が満足する可能性は高いですが、「明るくしてほしい」「淡くしてほしい」「涼しげな風合いで」等のオーダーでは個々人の感性によって期待する程度が異なってきます。意外に悩ましいのは「赤いバラを入れてほしい」といったオーダーで、バラ自体の色の幅が大きいために顧客によってトマトのような明るい赤からワインレッドのような暗い赤まで様々なイメージを持っています。さらには「可憐に」「凛々しく」「清楚に」「格調高く」「上品に」といった、至極抽象的なオーダーを受けることもあるでしょう。

このような場合にはオーダーの「言葉」に先入観を持たずに、相手がどのようなイメージを抱いているのかを多面的に質問し推測していく必要があります。例えば「可愛らしく」というオーダーであれば「春っぽいパステル調のような色味ですか？小ぶりでひらひらした花を沢山入れてふんわりとした感じですか？」といったように、色味や花形等どのような点に期待があるのかを確認していきましょう。抽象的なオーダーになるというのは相手の中にもこれといった確たるイメージが描けていない場合も少なくありませんから、ピタリとはまるイメージを考えるというよりもどちらかというと消去法的な選択になっていくことのほうが多いかもしれません。この例では「ハッキリした色やあまり白っぽい色味のものは少なめに。大型のランやユリ、ダリア等の華やかな花も外し気味に」等といった判断から、花材を選んでいくことになるでしょう。

可能であれば方向性の異なるサンプル写真を多く持っておき、イメージに比較的近いものを選んでもらった上で「もう少し白く」とか「この花はやめて」等より具体的に調整してほしいところを考えてもらうほうがより確かです。過去に参列した葬儀の写真や他社のパンフレット等が参考として示されることもありますし、葬儀の写真以外にも生花アレン

ジメントのカタログや花畑の風景写真等が出てくることもあります。他にも庭に咲いている花や着ている服を指して「こんな色ですか？」と訊ねることもあるでしょう。また色や季節、咲き方等で検索できる花のポケット図鑑等を打ち合わせ鞄に1冊入れておくと、顧客自身が思っている花の名称を思い出せないような場合にも役立ちます。情報量が多くなるようならタブレット等を活用するのも効果的でしょう。

▽宗教と植物

宗教には多くの場合、それぞれ教義あるいは伝統的に意味付けされていたり関係の深い植物、また大切にされていたり話題性のある植物等があります。これらは葬儀の生花装飾にそのまま導入できるとは限りませんが、その集団の感性や好みの傾向を理解したり、遺族や宗教者との心理的距離を縮めるための話題にしたりと、葬儀士であれば活用の機会も多い事柄です。

◇キリスト教

・ユリ／ユリ科ユリ属

ユリは純潔、謙虚さ、優しい心、美、また死等を表すシンボルとされており、種類も豊富で好む人の多い花です。キリスト教では例えば讃美歌に『うるわしの白百合』(1954年版讃美歌496番,日本基督教団出版局)という歌があり、葬儀における故人愛唱讃美歌として指定されることも多いでしょう。またカトリックにおいてはマドンナリリー(ニワシロユリ)と呼ばれる白いユリが聖母マリアのアトリビュート(持物)となっており、例えば受胎告知のシーンを描いた絵画では天使ガブリエルがユリの花を携えていることが一般的です。ただし新約時代のイスラエルではユリは一般的な花ではなかったため[8]、後年関連づけられたものであるようです。江戸時代末期に日本のテッポウユリが海外に広がると、その美しさからイースターリリーと呼ばれて人気を博し、マドンナリリーに取って代わった場合もあったようです。

近年の葬儀の現場では大きく咲くため目を惹くオリエンタルハイブリッド系のユリが流通量も多く主に用いられています。テッポウユリはそれ単体では確かに美しいのですが、アレンジとして他の沢山の中に加えるにはやや目立ちにくいでしょう。スタンドアレンジにスカシユリ等が使われることもあります。教会葬儀でも真っ先に思いつかれる花のひとつではありますが、一方でユリの強い匂いが苦手であったりアレルギー症状が出る人もいるため、必ず使えるというわけではありません。遺族がユリを好きでも講壇に立つ司式者がアレルギーで説教ができない、といったことあるので注意が必要です。

・アガパンサス／ヒガンバナ科ムラサキクンシラン属（またはアガパンサス属）

名前はギリシャ語のアガペー（愛）とアントス（花）を合わせたもの。アガペーはギリシャ語に４種類ある「愛」の語のうちの１つで、キリスト教神学においては神から人への愛、無償かつ不朽の愛[*9]とされています。もっともアガパンサスの命名についてはこれが「愛らしい花」であったため、と説明されていることも多く、またギリシャ神話由来（イリス、アヤメの伝承の元、あるいは混同）ではないかと説明されている記事も見られることから、少なくとも直接的にキリスト教上の「神の愛」に関連づけられた命名というわけではなさそうです。

大型・小型、常緑性・落葉性等バリエーションがありますが、大凡丈夫で放っておいても毎年きれいに咲くため、公共施設の花壇等手入れが行き届きにくいところ等にもよく植えられています。しかし蕾の状態で切ってしまうと咲きにくいため、切り花としてはほとんど出回りません。丁度庭に咲いているような時期であれば、多少切ってスタンドアレンジに加えるようなこともできるでしょう。

・クリスマスローズ／キンポウゲ科ヘレボルス属（またはクリスマスローズ属）

花に似た萼を鑑賞する植物で多くの園芸種があります。丈夫で管理が簡単なため、教会の花壇等にもよく植えられています。この種が好きで育てている人も多いのですが、背が高くないことに加え下を向いて咲くため、切り花としては使いにくく切り花としては流通しません。庭に咲いているものを飾りたい場合は、アレンジに入れずにこれだけを花瓶に挿して前机等に飾るほうが良いでしょう。

なお日本ではこの種を総じてクリスマスローズと呼び流通していることが一般的ですが、由来となったクリスマスの頃に咲く種はその中の一部で、多くの種はレント[*10]の頃に咲くため、それらはレンテンローズと呼ぶほうが正しいそうです[*11]。いずれにせよキリスト教の暦に関わる呼び方をされているため話題になることがあります。

・オリーブ／モクセイ科オリーブ属

古くから地中海沿岸地域の主要な産物のひとつで、聖書にも多く登場します。有名なところではノアの箱舟物語の中で、地上から水が引けたか確かめるためにノアが放ったハトが咥えて帰ってきたのがオリーブの枝（若葉）でした[*12]。またエルサレムの東にはオリーブ山と呼ばれる丘陵があり、イエスが最後の晩餐の後、ユダに売られて逮捕される直前にこの山のゲツセマネという場所で神に祈るシーン[*13]があります。

自家受粉しにくく複数株を並べておかないと実がほとんど付きませんが、日本ではむしろ結実を期待せずに観葉植物として飾られていることのほうが多いでしょう。生花装飾に用いるなら葉物としてアレンジの背面等に使用することが普通ですが、花と違って目立たないためあまり話題に上ることはありません。

・聖書に登場するその他の植物

聖書の中には他にも多くの植物が登場します。ブドウ・イチジク・リンゴ・ザクロ・ナツメヤシ・クワ・アーモンド・アロエ・サフラン・カシ・スギ・ポプラ・プラタナス・ヤナギ・アカシヤ・シュロ・ソテツ等、現在の日本でも馴染みのある植物もあります(一部には翻訳の都合等で実際は種が異なるものもあるかもしれませんが)が、葬儀の現場で用いるケースはほとんど考えられないためここでは割愛します。

◇仏教

・三大聖樹(三霊樹)

仏教における三大聖樹とは無憂樹(マメ科サラカ属)・印度菩提樹(クワ科イチジク属)・沙羅樹(フタバガキ科サラノキ属)です。ただし本来のものは日本の風土では育たないため、印度菩提樹はアオイ科シナノキ属のボダイジュ、沙羅樹はツバキ科ナツツバキ属のナツツバキ等が国内では多く代用として扱われています*14。釈尊が入滅した折に真っ白になったという伝説のある沙羅樹は、日本でも仏教葬儀において「シカ(四華・死華等)」という一対の葬具として用いられることがあります(近年見ることは稀になりました)。

・キク／キク科キク属

日本で仏教葬儀といえばキク(特に白の中菊)、とほとんどの人が思うほどイメージの定着した花ですが、元々同じ中国から伝来したもののその時期は仏教よりも2〜3世紀遅く、直接的に仏教とキクが関連づけられているわけではありません。また自然の状態では秋に咲く花ですから露地物が年中収穫できるわけではなく、葬儀に盛んに供えられるようになったのは電照栽培(短日植物であるキクの開花を人工的に遅らせる栽培技術)とビニールハウス栽培が広がった昭和30年代以降です。国内でも古くから栽培され好む人の多い花であったことはもちろんですが、切り花としても保ちが良く葬儀への対応力が高かったことや、海外においてキクを墓前に供える文化が戦後輸入され広がったという説もあるようです*15。また薬草としても用いられてきたキクは「邪気を払う」とも言われており、葬礼の場や仏前を浄めるという感性に適合しやすかったという理由もあるでしょう。このように

宗教的にではなく文化的に葬儀に取り入れられていったものの、日本における葬儀の大多数が仏教式であったことから「(仏教)葬儀＝キク」という印象が自ずと強まっていったのでしょう。

このように見ると日本のキリスト教葬儀において仏教的だからといってキクを嫌う傾向はある種の偏見だと言うこともできるのですが、究極的には葬送に携わる人たちの好みの問題ですから、わざわざに指摘する必要もまたありません。ただ、キクを好んで用いたいという人がいた場合に、その希望を支える説明材料としては覚えておくと良いでしょう。

・蓮華(れんげ)／ハス科(またはスイレン科)

蓮華はハスやスイレンの総称で、泥の中から美しく咲く姿が清らかさや聖性の象徴と捉えられており、特に仏教では輪廻転生の暗喩するものともされています。「極楽に咲き誇る」と阿弥陀経に登場し、如来像の座が蓮華を模していたり、聖観音のアトリビュートとなっている等、仏教とも関連深い植物です[16]。時期によっては市場に出るものの、花は扱いが難しく葬儀において生花装飾として用いることはまずありませんが、作り物のハスに電球を組み合わせた「蓮華灯」等と呼ばれる飾りが祭壇脇等に飾られたり、外周を蓮華形に形成したロウソクが使用されることもあります。

・シキミ／マツブサ科シキミ属

香りが強く、また摂取すると死亡するほどの毒を持つ植物です。生命力も強く、切った枝を水に挿しておくだけで花を付ける場合もあります。常緑樹で葉が四季を通して美しいため「四季美」と呼ばれた等、名称の由来については諸説あるようです。関西では「シキビ」とも言い、他にも多様な別称があります。漢字は「樒」ですが仏教との強い関わりから木偏に佛とも書かれます。伝説では鑑真が日本にもたらしたとされている(後年の研究でこの種は日本の自生種と考えられている)ことや、青蓮華(スイレン、仏の目の喩え)に似ているとされること、香りが場を浄め邪気を払うと信じられたこと等から、古くから仏教に積極的に取り入れられました。またその毒性によって獣を退け、墓が掘り返されるのを防ぐために墓地にも多く植えられました。

仏教葬儀では枕飾りを整える際に花立てに樒の枝を1本挿す(一本樒)ことが一般的[17]です。また2023年11月期テーマレポート「葬式場の設定と配置」で触れたように式場周りに配されることもありました。2000年代に入ってすぐの頃までは主に関西で供花や花輪に代わって樒を供える習慣もありましたが、近年葬儀規模が縮小し設営が室内で完結する傾向が強まるにつれ、表樒や供え物の樒はほとんど見られなくなりました。日蓮正宗や派生し

た創価学会では特に榊は重用されており、葬儀祭壇においても生花を用いず榊だけを多量に盛り付けるスタイルが指定されることもあります。

◇神道

・サカキ／モッコク科サカキ属

本来サカキは特定の種を指す名称ではなく、神事に用いた様々な常磐木全般を指す名称で、神と人との「境(目の)木」(黄泉比良坂の「サカ」等と同様)がその名の由来です。平安時代以降に現在のサカキを特定して指す名称になり、また神事に用いることから「榊」という字を当てられるようになりました*18。葬儀を含む神事全般で祭壇の両側に真榊(神器と幟、榊を組み合わせたもの)が設えられ、また紙垂を付け玉串として神前に捧げます。本種のサカキに比べて小さいヒサカキ等が仏花や墓花のバックグリーンとして用いられることは多いですが、葬儀祭壇の生花装飾のバックグリーンにサカキが用いられる例はあまり見ません。

---

*1『死に方を忘れた日本人』(碑文谷創,大東出版社,2003)p66「お葬式批判」の検討 等

*2『冠婚葬祭入門』p157,塩月弥栄子,光文社,1970

*3『キリスト教冠婚葬祭入門』p155,山内六郎,聖文舎,1973

*4『花きの生産・消費の動向と病害発生をめぐる諸問題』(植物紡疫 第47巻 第2号),1993

*5仏教においてバラは棘があり他者を傷つけるため不殺生戒のある仏教に(特に生命の理に思いを致す葬儀にあっては)そぐわないという意見や、葬儀に派手な外形・色の花がそぐわないという意見、またキリスト教においてキクは仏教葬儀等異教の葬礼を想起させるからといった意見があるためですが、いずれにせよ各宗教における教義などに根ざしたものではなく、日本における独特な習俗的感性とみてよいでしょう。実際には故人や遺族の好みによってこれらの花が使用されることもあります。

*6よく聞かれる「オアシス」や「アクアフォーム」は商標。

*7フローラルフォームの「オアシス」等が有名なため、「オアシスベース」等の商品名もある。事業者の中では単に「ベース」や「皿」、「水盤」等と呼ぶこともある。

*8Wikipedia 『ユリ』参照

*9Wikipedia『アガペー』参照

*10四旬節(カトリック, ルーテル), 受難節(プロテスタント諸派), 大斎節(聖公会)等。イースター(復活祭)までの約40日(46日)間。

*11Wikipedia 『ヘレボルス』参照

*12［旧約聖書］創世記 8章

*13［新約聖書］マタイによる福音書 26章，マルコによる福音書 14章

*14Wikipedia『ムユウジュ』『インドボダイジュ』『サラソウジュ』参照

*15『日本で「仏花といえば、キク」になった意外な理由-山と渓谷オンライン』（稲垣栄洋,2020）

*16Wikipedia 『ハス』参照

*17『増補三訂 葬儀概論』p115,碑文谷創,表現文化社,2011

*18Wikipedia 『サカキ』参照